



Title	アンペイドワークとペイドワークについての子どもの認識 : 身近な人・親の暮らしを綴る教育実践から
Author(s)	久木田, 絹代
Citation	大阪大学教育学年報. 2022, 27, p. 27-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86392
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アンペイドワークとペイドワークについての子どもの認識 —身近な人・親の暮らしを綴る教育実践から—

久木田 絹 代

要旨

本研究の目的は、暮らしを綴る教育実践を通して、家族が担っている労働を子どもはどのように認識し、それにいかなる意味づけをしているのかを探ることにある。国語と総合的な学習の時間の両方を用いて2000年に筆者自身が行った実践で得られた文章を分析対象に、言説分析により中学一年生の同一時期の子どもの認識を探った。その結果3つのことが明らかになった。第一に、多くの子どもはアンペイドワークを労働とは認識しておらず、ペイドワークを労働と認識しその中心を担うのは父とみる傾向があった。それでも暮らしを綴る実践だったことから、半数近くの子どものがアンペイドワークを記述していた。第二に、アンペイドワークへの意味づけのしかたには女子と男子とで違いがあった。女子はアンペイドワークをよく意識しその価値も認めている一方、男子はそうではなかった。これらのことから、綴った時点で子どもたちが性別分業観および性差別意識（女性役割の軽視）を内面化していることが推測できた。第三に、暮らしを綴る実践は、アンペイドワークの存在に気づき、性別分業の実態や課題について子どもが考え始める契機となりうると思えられた。

I 問題意識

労働には賃金が支払われないアンペイドワーク（unpaid work）と支払われるペイドワーク（paid work）がある。この二つの労働は「家庭」という生活単位でみた場合どのように行われているのだろうか。『男女共同参画白書』（2020）から2001年の日本の状況を見ると、アンペイドワークに費やす時間は週全体の平均で妻が4時間12分（91.0%）夫は25分（9.0%）（共働き世帯）である。ペイドワークに就く女性は年々増え続け2019年の就業率は71.3%に達する（男性84.4%、2019年「労働力調査」総務省統計局）⁽¹⁾。多くの女性はペイドワークと同時にアンペイドワークの大部分を担っている。1970年代以降マルクス主義フェミニズムの立場などからアンペイドワークが労働とみられないことに異議を申し立てる動きが高まり、家事、育児などの支払われない労働も「労働」と定義し直された。社会のシステムは女性に二重の労働を強いると共に女性を二流の労働者として扱い、多くの女性に経済的な困窮をもたらしている（竹中 2011、大沢 2011、伊田 2015など）。その中で学校は性役割を肯定するメッセージを子どもたちに送り続け、性別分業を基盤とした社会を支える役割を果たしてきた（木村涼 1999）。

日常の中にある課題を子どもたちに捉えさせる試みとして、暮らしを綴る実践が戦前から始まっている。生活綴方運動を牽引した国分一太郎は、「綴る」という言葉に場面を具体的に描写し、批判的に振り返り分かるようになるという意味を持たせ、「書く」という言葉と区別して定義する（国分 1977）。例えば暮らしを綴り共有することで、子どもたちは家庭におけるジェンダー・バイアスを目を向けることができるだろう。またおそらく、ジェンダー・バイアスの再生産を続ける学校についても問い直すことができるだろう。

本研究の目的は暮らしを綴る実践を通して子どもが二つの労働をどのように認識し、いかなる意味づけをしているかを探ることにある。筆者は1988年から2018年まで公立中学校で暮らしを綴る実践を行ってきた。本研究では同じ時期に同じ授業を受けた1クラス分の子ども⁽²⁾の文章に着目する。その形成過程には様々な要因が係っているが、ここではその複雑な過程から実践の教育的効果を抽出することを目指すのではなく、中学生期のある時点での子どもの認識を表すものとして、子どもによる文章の言説分析を行う。

II 先行研究

本研究の先行研究にはジェンダーと教育研究と、「綴ること」についての研究という二つの流れがある。

まずジェンダーと教育研究の流れを概観する。学校は日本近代化の過程で生まれた良妻賢母思想を具体的に男は仕事、女は家庭という領域の分担として教えてきた。戦後はこれに対して現場から疑問が上がり教育内容の洗い直しが進められた(奥山 1993、上田 2003、笹原 2003)。教科書には「母親は家事労働、父親は社会的労働という設定が多い」(日景ほか 2001、pp.156-157) ことなど、教科書におけるジェンダー・バイアスも明らかにされている(渡辺 2015、勝木ほか 2020など)。学校内部についての実証的な研究も行われてきた。子どもたちは男子優先の慣習⁽³⁾や学校内の役割を性別特性と関連させて認識していること(木村涼 1999)、小学校低学年から高学年に上がるにつれて女子の沈黙・周辺化、男女の差異の強調が行われていくこと(木村育 2004)、中学校の教室にはジェンダー・コードが強固に存在し、生徒たち自身がコードによる行為解釈を通してジェンダー秩序を維持していること(上床 2011) など、ジェンダーと教育研究は多くのことを明らかにしてきた。

続いて「綴ること」についての研究を概観する。「綴ること」は現在の学習指導要領では「書くこと」の中に位置づけられる⁽⁴⁾。戦前は芦田恵之助、鈴木三重吉の『赤い鳥』、北方教育運動が、戦後は日本綴方の会(改称後日本作文の会)が実践や研究を牽引してきたが、研究・実践共に多く取り上げられるのは国分一太郎である。国分は生活綴方を国語科文章表現指導の中に位置づけ(田中 2008)、現実を生き生きと抽象的でない具体的な文章で表現させ、学級で読みあうことで視野の拡大や思考の深まりやつながりがうまれることを重視した(国分 1977)。「綴ること」は人権教育でも実践され研究されている。森は生活を綴り語り合うことには、一人ひとりがたくさんの思いを抱え込んでそこにいることを知り合う意味があるという(森 2000)。岩槻は識字学級、公立夜間中学校、簡易宿泊所(ドヤ街)や在日朝鮮人集住地区で、人々が綴ることによって社会的な文脈を対象化していくことを明らかにした(岩槻 1998)。管見ではあるが子どもが暮らしを綴った文章をジェンダーの視点で分析した先行研究はほとんど見られない⁽⁵⁾。本研究では子どもが仕事⁽⁶⁾と暮らしを取材して綴った文章をジェンダーの視点で読む。分析対象はX町の中学校1年生が2000年に綴った文章である。

III 分析対象と分析の方法

X町は農村地帯にあり工業団地を有している。筆者は1年A組37人を担任し5クラス中4クラスの国語を受け持った。実践には国語と総合的な学習の時間(以下、総合)を使っている。国語では「一緒に暮らしている人の誰か一人に対象をしばり、仕事と暮らしを取材して綴る」をテーマに、[書く1 分かりやすく書く]と[わたしの国語学習 身近な題材で書く]の単元で進めた(「新しい国語1」東京書籍)。当時X中学校の総合は「平和」「人間」の二領域で3年間を繋いで行っていたが、この実践は「人間」の中の「進

路をみつめる」で実施し3年生では進路公開⁽⁷⁾に繋がっていた。表1は実践全体の経緯である。

表1 実践の経緯

国語

総合的な学習の時間

	テーマ 身近な人・親の暮らしを綴る ねらい 身近な題材を選び、情報を集め、伝えたいことを分か りやすく書く			テーマ 生きること・働くこと ねらい X町に住む人々の「仕事」を探検し、進路について 考える	
月	教科書の単元/内容	学習内容	時間(50分)	活動内容	時間(50分)
6	分かりやすく書こう ・時間の経過にしたがっ て書く ・情報を整理する	題材を選ぶ ・参考作品(3作品) を読む ・取材の仕方が分かる	3	取材計画を立てる 取材をする(2週間以上の期間を取る)	1 学校外
7	身近な題材で書こう ・題材を選ぶ ・材料を集め構成する	構想表を書く 下書きをする	3		
9	推敲する ・互いに読み合う	推敲する ・1人の作品をみんな で読む ・お互いに読む 作品を綴る	2 2		
10～1				学級で文章を読み合う	12
2～3				職場体験の前に、X町のさまざまな職業につい て調べる	3
			合計 10		合計 16

導入では家族の労働を綴った参考作品(過去の生徒作品)3点を読み、その後身近な人・親への取材を課題とした。取材に際しては「自分の暮らしを支えてくれている人を取材してください」「取材は一人に絞ります」「家でのようすも綴ってごらん」と伝え、「構成(はじめ、なか、おわり)の(おわり)には分かったことや考えたことを綴ります」などのアドバイスをした。取材後下書きを行い、9月はその中から一人(男子u)の文章を読んで良いところを話し合ったり、互いに読み合ったりして推敲して綴った。分析対象はこうのようにして生まれた36人の作品とuの下書き、合計37人の文章である⁽⁸⁾。

文章を繰り返し読む中で分析の二つの軸が浮かび上がってきた。第一の軸は、アンペイドワークとペイドワークの捉え方についてである。アンペイドワークでは記述されている所に実線を引き、子どもの表現で内容と登場回数を数えた。例えば「(お母さんは)朝5時半に起きてみんなの朝ごはんをつくってお姉ちゃんの弁当をつくったりしています」(カッコ内の補足は筆者)では母のアンペイドワーク「朝ごはんをつくる」と「弁当をつくる」を1回ずつ数える。ペイドワークでは取材しているペイドワークを取り出した。例えば「お父さんは建築関係の仕事をしています」では父のペイドワークは「建築関係」である。

第二の軸は、労働にどのような意味づけをしているかについてである。意味づけのある箇所に波線を引き数え上げる作業を通じて、意味づけを感謝・尊敬、共感・心配、不満・否定という3つのカテゴリーに分類した。例えば「してくれてうれしい」「すごい」などの表現や前後からそう読み取れる場合は感謝・尊敬カテゴリー、「確かにそうだ」「大変だ」「心配だ」などの共感または心配は共感・心配カテゴリー、「不満だ」「こっちも大変だ」「それはよくない」など不満だったり否定している場合は不満・否定のカテゴリーで取り出す。一か所に複数の意味づけがあったり同じ内容の繰り返しがあったので、実数は把握しつつも内容ごとの綴った人数「のべ人数」、繰り返しも含めた「のべ登場回数」を設定した。職場の特定を避けるための記号化以外全て原文に従っている。分析は取材対象が母か父かと綴った子どもの当時の性自認(ただし推測)に分けて行った。子どもにとって祖母は母と、祖父は父と近い関係にあったので、祖母は母に、祖父は父に含めて数量化した。大文字のアルファベットは女子を小文字は男子を表している⁽⁹⁾。

IV 作品の分析

1 中学生はどんな仕事取材したか

(1) 取材の中心に選んだのはペイドワーク

取材対象に選んだのは父26人、母9人、祖母1人、祖父1人である。それ以外を選んだ子どもはいなかった。当時の記録では専業主婦の母が5人いたが取材はされてない。2人が母とのひとり親家庭だった。

子どもが選んだ取材対象 父 26 (女子10 男子16) 人 母 9 (女子5 男子4) 人

祖母1 (女子1 男子0) 人 祖父1 (女子0 男子1) 人

取材対象などの概要をまとめたのが表2である。取材の中心には37人全員がペイドワークを選んでいてた。

表2 取材対象・「仕事」として取り上げているもの・アンペイドワークの記述の有無

女子 16人								男子 21人							
子ども	取材対象	「仕事」として取り上げているもの				アンペイドワークの記述の有無		子ども	取材対象	「仕事」として取り上げているもの				アンペイドワークの記述の有無	
		アンペイドワーク		ペイドワーク						アンペイドワーク		ペイドワーク			
		母 (祖母)	父 (祖父)	母 (祖母)	父 (祖父)	母 (祖母)	父 (祖父)			母 (祖母)	父 (祖父)	母 (祖母)	父 (祖父)	母 (祖母)	父 (祖父)
A	母	○		○		○		h	母			○			
B	母			○		○		n	母	(○)		○		○	
H	母			○		○	○	o	母			○			
I	祖母	○		○		○		q	母			○			
K	母			○		○		a	父				○	○	
M	母	○		○		○		b	父				○		
C	父				○			c	父				○		○
D	父				○			d	父				○		
E	父				○		○	e	父				○		○
F	父				○			f	父				○		
G	父				○			g	父				○		
J	父				○		○	i	祖父				○		
L	父				○			j	父				○		
N	父				○			k	父				○		
O	父				○			l	父				○		○
P	父				○			m	父				○		
								p	父				○		
								r	父				○	○	
								s	父				○	○	
								t	父				○		
								u	父				○	○	
合計人数		3	0	6	10	6	3	合計人数		(1)	0	4	17	5	3

注) nはアンペイドワークを明確に仕事とは表現していないが、「家の仕事」という表現がある

(2) アンペイドワークの登場

アンペイドワークは16人に登場する(表2)。その中でアンペイドワークを明確に「仕事」と認識していたのは3人である。3人には例えば次のような表現がある。

A お母さんの仕事は、せんとく、料理、そうじ、まとめると、家事です。あとは、ガソリンスタンドと内職です。(実線は筆者)

ペイドワークを中心に取材しながらも、16人はなぜアンペイドワークを綴ったのだろうか。二つの要因が推測できる。一つには、テーマが「暮らしを綴る」だからだろう。子どもは折々にテーマを確かめながら綴っ

ている。二つには、綴ることにかんする指導という要因が考えられる。子どもは取材したことをもとに一つひとつ、場面を思い浮かべながら綴るように指示を受けている。日常の場面を思い浮かべた結果、生活実態としてアンペイドワークが拾い出されることになったのだろう。

(3) 典型的な2つの作品

表2のように、最も多いのは父のペイドワークを選びアンペイドワークを登場させなかった文章、最も少ないのは母のペイドワークを選びアンペイドワークを登場させた文章である。前者の典型として女子Cの文章（無題）を、後者の典型として男子nの文章（題名「母の仕事」）を、長くはなるが全文を引用する。

C 私の父さんは店で売る肉を切ったりする仕事をしています。/ 店の裏にある小さい工場で肉をちょうどいい大きさに切ったりしています。/ お父さんが仕事する曜日は、月曜日～金曜日までで土曜日と日曜日は休みだそうです。時間は、少し前まではAM7時30分からPM4時くらいに家の方に帰ってきてたけど、今は、AMの5時からはいたつに行つて、前よりいそがしくなつたみたいです。/ そしてお父さんは、お正月とかおぼんの時とかがいちばん売れるそうです。/ でもお父さんは、あまり売れなかつたりした日は、気げんがよくなさそうです。だからそんな感じの時は、あまり話したりしません。でもお正月の時が一ばん売れてうれしそうにしている時なんか自分もうれしくなります。 / 時々お父さんの仕事をのぞくと、とても大変そうにしています。特に夏は暑いからとてもきつそうです。けどお父さんの表情を見ると一しょうけんめいががんばっている様子がわかります。 / そんなお父さんが休みの日は1日じゅうと言っていいほどパソコンをしています。それかつかれがたまつてかねています。けどお父さんが1ばん楽しみなのは休みの日に魚つりに泊まりがけで行くことみたいです。けど子どもたちとはいかず自分の友達と行っています。/ はっきり言って私は全ぜんつりとかきょうみないから、行きたいなど思いません。それで楽しみにしてた魚釣りに行くのは別にいいけど魚釣りすら帰ってきて全ぜん釣れてないとあまりきげんもよくないし少し暗いので話にくいカンジです。あとお父さんはたまに仕事がおわつたらいざかやさんにおさけをのみに少しよって家に帰ってきたりするけど、のんだ次の日は、とても頭がいたそうだけど、ちゃんとはいやくおきていつものように5時から（朝の）はいたつに行っています。そんなことは、あたりまえだとおもうけど自分ではそれがすごいと思うこともあります。 父は、この仕事でこうかいしたことはないそうです。 / 父は、みんなのためにたくさん働いて、毎月ちよきんをして行くためにがんばっているそうです。 / 私も大人になったら自分の仕事をいっしょうけんめいがんばれるようになりたいし、親子ゲンカとかよくするけどふつうにかぞくにかんしゃしてます。（全文、カッコ内の補足はC、波線は筆者、/は段落の変わり目を表す、以下同じ）

Cは精肉店を営む父を取材した。「大変そう」だが「表情を見ると一しょうけんめいががんばっている様子」がわかる、父を見習って「私も大人になったら」「いっしょうけんめいがんばれるようになりたい」と感謝し尊敬している。仕事の大変さが綴られることで感謝や尊敬は強調される。Cの文章からは父のペイドワークにたいする感謝や尊敬が読み取れる。

n 僕のおかあさんの仕事は、◇◇という製品を作っている。◇◇と言うのは、テレビやパソコンなど（に）入っている集積回路である。/ お母さんの職場は、二交代なので昼に帰ってくるときは、朝5時から、昼2時に終わる。夜に帰って来るときは、昼1時から、夜10時までである。仕事場について、仕事をする前に、エアシャワーをして、手を洗って仕事をする。/ 仕事の内容は、ウエーハという製品を細く切つて、製品を作っている。お母さんの担当の職場は、細く切つた、アイシーチップを、パッケージにつけ、それをきんせんではいせんする。それを検査して、ふたをかぶせる。その後また、検査する。

製品の、裏に番号をうってそれを、さらに検査をして、良品と、不良品の良品だけを、箱につめて、出荷する。/ 休みは、土、日だけしかない。でも時々平日でも、休みの日がある。/ お母さんが帰ってくる時は、車のエンジン音でわかる。遅番の時は、フロに入って寝るし、早ばんの時は、そうじをしてひまがあったら少し昼寝をする。早番の時はお母さんがご飯を作るけど、遅番の時は、ばあちゃんが作る。/ 休みの日はだいたい、7時くらいまで寝て、それから、朝ご飯を作って、洗たく、そうじなどをしていたら、12時ぐらいになるので昼ご飯を作る。テレビを1時間ぐらい見て、1、2時間寝る。それから洗たく物をたたんで、6時ぐらいになったら、夕ご飯を食べて、食つきを洗って、7時ぐらいになったら、風呂に入る。それから11時ぐらいになったら寝る。/ 仕事でくろうしていることは、お母さんは、目が悪いので細い物を作る作業が大へんだそうです。あと、家でくろうしていることは、家の仕事も、あるので大へんだそうです。仕事が終わると、手がいたくなるそうです。/ この作文を書いた感想は、あまり家にいなかったのしゅざいができなかったけど、いい作文ができてよかったです。(全文、カッコ内の補足、実線・波線は筆者)

nはIC工場で働く母を取材した。明確に「仕事」とみる表現はないが男子ではnだけがアンペイドワークを詳細に綴っている。休日母は「朝ご飯を作」り「洗たく」「そうじなど」をし「昼ご飯を作」り、夕方は「洗たく物をたたんで」夕食後は「食つきを洗」う。「家でくろうしていることは、家の仕事も、あるので大へんだそうです」と、二つの仕事が連続していて負担が大きいことをnは心配している。以上典型例をみたが、2節と3節では二つの労働を子どもがどのように綴るのか、全体の傾向や特徴を明らかにする。

2 アンペイドワークの認識

(1) どんなアンペイドワークを綴っているか

子どもはどんなアンペイドワークを認識しているのだろうか。女子は8人がのべ54回、男子も8人がのべ24回登場させる。女子は男子より多く記述している。82.1%は母がしている場面である(表3参照)。

では、女子はどんなアンペイドワークを記述しているのだろうか。Hは次のように綴った。

H 私のお母さんは、いつもお姉ちゃんがいく時間にまにあうように、朝5時に起きて、自分の弁当、お姉ちゃんの弁当、お父さんの弁当を時間までに、まにあうように作ります。…弁当とかを作り終わったら休むひまなく朝ごはんを出して、夜のうちにしといた洗たく物を干します。…犬やねこにエサをやったら仕事へ出かけていきます。…本当はいつもお母さんがむかえにきてくれたのでそう言う日(帰りが遅くなった日)には、お姉ちゃんが夕食を作ってお父さんとむかえにきてくれます。…食べおえてお母さんが少し横になろうとすると、お父さんが早くした方がきつくないからすぐ、「かたづけろ」といいます。だから、つかれている日でも少し休みたくても休めません。…でも、本当きついです。お母さんは、ふつうの時間に帰ってきたり、休みの日があつたりして食事を作るのが早く終わったら、私のむかえにもきてくれます。(…は中略、以下同じ。カッコ内の補足、実線・波線は筆者)

Hは朝早くから夜遅くまで母がアンペイドワークをするようすを綴る。食べ終えて母が「少し」休もうとすると父が「『かたづけろ』といい」、母は起き上がって片付け始める。母が疲れていても父はしない。それはKにおいても同様である。Kの母は美容師で昼間は義母の美容室、夕方からはレストランで働く。

K 12時から1時ぐらにかえってきて、ちゃんを洗ったり、ごはんを、たいたりして、お風呂に入て寝るそうです。(実線は筆者)

表3 どんなアンペイドワークが綴られているか

綴った人	女 子		男 子	
どんなアンペイドワーク/ する人	母 (祖母)	父 (祖父)	母 (祖母)	父 (祖父)
食事づくり 注2	17		5	注3 1
洗濯	6		2	
掃除	5		3	
食事のあと片づけ	5		2	
ペットの世話	6			
庭仕事	1			5
子どもの送迎	4	1		
家族を起こす	2		1	
買い物	1	1		
洗車		1		1
試合の応援	1			1
朝家族を見送る	1			
夫の送迎			1	
家のカベ洗い				1
一緒に起きている	1			
悩みを解決する				1
子どもを怒る		1		
小 計	50	4	14	10
合 計		54		24

注1) 空欄は0を表す

注2) ここでは「食事づくり」などのように内容をまとめている

注3) 「母が熱をだしたとき」で日常的には母のアンペイドワーク

アンペイドワークを誰が担っているかを表したのが表4である。全体の合計78を基に割合をみると、母と父両方がするのは19.2%、母だけは74.4%、父だけは6.4%で母だけがする割合は高い。「食事づくり」が最も多く「洗濯」「掃除」「食事のあと片づけ」など毎日欠かせない労働は母だけがしている。「起こす」「見送る」「送迎」などやや広い意味でのケア労働では、母は子どもと夫とペットを、父は子どもをケアしており、母は父の6倍である。子どもはアンペイドワークの分担をこのように記述している。

表4 アンペイドワークを誰が担っているか

母(祖母)も父(祖父)もしている					母(祖母)だけがしている			父(祖父)だけがしている		
アンペイドワーク	女 子		男 子		アンペイドワーク	女 子	男 子	アンペイドワーク	女 子	男 子
	母	父	母	父						
庭仕事	1			5	食事づくり 注2	17	6	洗車	1	1
子どもの送迎 注3	4	1			洗濯	6	2	家のカベ洗い		1
買い物	1	1			掃除	5	3	悩みを解決する		1
試合の応援	1			1	食事のあと片づけ	5	2	子どもを怒る	1	
					ペットの世話	6				
					家族を起こす	2	1			
					朝家族を見送る	1				
					夫の送迎		1			
小計	7	2		6	一緒に起きている	1				
合 計		9		6	合 計	43	15	合 計	2	3

注1) 空欄は0を表す

注2) 父がする1回は「母が熱をだしたとき」なので「母だけ」に入れる

注3) 父がするのは母が行けないとき

Hは「早くした方がきつくないから」父は「かたづけろ」というのだと理由づけ、同時に「でも、本當きつい」と綴る。Kは大変と思っているかもしれないが母がすること自体には疑問を持っていないようである。このように大変さに共感してはいるが理不尽だと怒る表現がないのは、母がするのは当然で疑問に思ったり考えたりしたことがなかったからだろう。子どもたちは性別分業意識を既に内面化していると考えられる。

男子では、rが「(父は) 朝はいつも起きれないからお母さんが起こします」(カッコ内の補足、実線は筆者)と綴ったように、n以外の4人では父を助ける母のアンペイドワークが1回ずつ登場し、4人ともそれを当然と思っていた。

(2) アンペイドワークへの意味づけ

では子どもはアンペイドワークにどのような意味づけをしているのだろうか。まとめたのが表5である。母への感謝・尊敬は女子には登場するが男子には登場しない。父への感謝・尊敬はその逆である。どんな感謝・尊敬が登場するかを表6に示した。

母への感謝・尊敬は女子では「朝、はや起きをして、夜おそくまで」「自分のことを後まわしにしてくれる」「みんなが喜びそうなお飯を考えて作ってくれ」ることなどに向けられている。

A 朝、はや起きをして、夜おそくまで、がんばっています。…いつも、自分のことを後まわしにしてくれるお母さん。

I みんなが喜びそうなお飯を考えて作ってくれます。(波線は筆者)

男子は父への感謝・尊敬をcでは「疲れていても」「根気よく」「みんな(家族)のために」と3回、1では「母が熱をだしたら」「食事に呼びに」「悩みを解決」「作業に協力」と4回繰り返し登場させる。「尊敬」が先にあり、その父がしていることに対して尊敬が向けられているようである。女子では父への感謝・尊敬はなかった。尊敬という言葉は父に向けて男子だけが使っている。

c みんなのためにしているしば植えをする姿に尊敬しました。(波線は筆者)

母への共感や心配は7人に登場し、全員がペイドワークの後「休めない」まま働いていることを心配していた。先述のnもその一人である。Iは次のように綴る。

I 農業の時は、おじいちゃんと一緒にやるけれど、家事はおばあちゃん一人なので、疲れが溜まっています。だから、(午後)30分間でも、寝る時に、疲れを癒して、そしてまた、仕事をしなくてはいけないのです。時々、おばあちゃんは、休めないときがあります。やる事がいっぱい繋がっているからです。

(カッコ内の補足、波線は筆者)

詳細に綴ったnとは異なり、母のアンペイドワークを1回だけ登場させた男子は共感も心配もしていない。

表5 アンペイドワークへの意味づけ

母(祖母)のアンペイドワーク							父(祖父)のアンペイドワーク						
女子 6人			男子 5人				女子 3人			男子 3人			
カテゴリー	綴った人数	のべ人数	登場回数	綴った人数	のべ人数	登場回数	カテゴリー	綴った人数	のべ人数	登場回数	綴った人数	のべ人数	登場回数
感謝・尊敬	5	10	12				感謝・尊敬				3	8	8
共感・心配	6	7	11	1	1	1	共感・心配						
不満・否定							不満・否定	1	1	1			

注) 空欄は0を表す、父への不満・否定は「たまに家において『べんきょうしろ』とおこる」

表6 アンペイドワークへの感謝・尊敬

母のアンペイドワークにたいして				父のアンペイドワークにたいして			
女子　　6人		人数	回数	男子　　3人		人数	回数
朝早くから夜遅くまでしている		3	3	疲れていてもしてくれる		1	1
自分のことは後まわしにしてくれる		2	2	根気よくしてくれる		1	1
みんなが喜ぶご飯を考えてくれる		2	2	家族のためにしてくれる		1	1
子どもを応援してくれる		1	3	子どもを応援してくれる		1	1
楽しんでやっている		1	1	母が熱をだしたらしてくれる		1	1
いつも忘れないでしてくれる		1	1	食事に呼びにきてくれる		1	1
				悩みを解決してくれる		1	1
				作業に協力してくれる		1	1
のべ人数・回数		10	12	のべ人数・回数		8	8

3 ペイドワークの認識

(1) どんなペイドワークを綴っているか

子どもはどんなペイドワークを認識しているのだろうか。母（祖母）のペイドワークは10人が綴っているが最も多いのは接客・販売で4人、ここにはダブルワークの母が2人いる。続いて内職が2人⁽¹⁰⁾、ここには内職と接客でダブルワークの母が1人いる（ダブルワークは合計3人）。あとは製造、設計・建築、農業、病院（看護師）が1人ずつである。父（祖父）のペイドワークは27人が綴り、製造と自営がそれぞれ5人、接客・販売と公務員は4人ずつ、農業と設計建築が3人ずつ、運送2人、銀行1人である。

取材をしているので文章からは雇用形態も浮かびあがる。文章で不明瞭でも日頃の話で推測できる点もある。母は10人のうち2人が正規雇用（看護師1、製造1）ではほかは非正規雇用と内職、父は27人のうち自営と農業の8人以外全て正規雇用である。

(2) ペイドワークへの意味づけ

では子どもはペイドワークにどのような意味づけをしているのだろうか。

意味づけを探っていく過程で、ペイドワークでは対象が誰かによって綴り方に異なる傾向があることがわかってきた。一節で引用したCとnの文章をみてみよう。nは冒頭から10番目の文「製品の…出荷する」まで実態だけを淡々と綴っている。Cも冒頭から「お父さんが…休みだそうです」までの3つの文ではそうである。しかし4番目の文以降、「そしてお父さんは…いちばん売れるそうです」の一文以外、Cはペイドワークにかんするどの文にも意味づけをしている。母を対象にした10人のうち6人では実態だけを綴る文が多かったが、父を対象にした27人では全員に早い段階から何らかの意味づけが付随している。

最も多い意味づけは感謝・尊敬である。父へ向けては111回登場し、母（17回）の6.53倍である。「見習いたい（15人）」「大変だが頑張っている（13人）」「やりがいをもっている（8人）」「学び続けている（6人）」「休まない（6人）」「家族のため頑張っている（5人）」「重要な仕事だ（5人）」など父には25通りの意味づけが登場し、その数は母（7通り）の3.6倍である。一人の文章の中での登場回数は、平均で母は2.43回、父は4.83回、子どもは同じ表現や複数の表現を繰り返して父への感謝・尊敬を綴っている。男女で比較すると、例えば「大変だが頑張っている」は女子3人、男子10人が綴っているなど、その傾向は男子にやや強い。尊敬という言葉は父には直接使われることもある。それは男子に限られる。

d 「仕事はきついが楽しい」と言った。お父さんは僕にとってそんけいする人だ。（波線は筆者）

母だけにあるのは「二つかけ持ち」で頑張っている、仕事の話は「聞いていて楽しい」という意味づけである。hは次のように綴った。hは母方の祖父母と母との4人暮らしである。

h お母さんの仕事は〇〇（スーパー）に行って△△（24時間営業レストラン）に行きます。たいへんそうだなーと思います。〇〇の仕事は主にレジをします。／お母さんはよく仕事であった話をしてくれます。「今日、あの人のお母さんとあってこんなことがあったよ。」というような話を聞いていると、とても楽しいです。／あと、お母さんは〇〇でとく別な仕事をまかせられています。このまえその仕事を見たら、あの人は何時から何時まで働くというのを何十枚も書いていました。とてもきつそうでした。／夜は△△で料理を作っています。／料理を作るのに最初のほうは、ほうちょうとかで手を切ったりして家にかえってきたときはびっくりしました。／〇〇と△△の働く時間を合わせると16時間です。／なんでお母さんがこんなに働いているかというのを僕を育てるためです。きゅうしょくひとか僕が習っている物とかでどんどんお金がへっていくから、お母さんは二つの仕事をかけもちして生活を安ていさせているわけです。（カッコ内の補足、波線は筆者）

hは「僕を育てるため」に「二つの仕事をかけもちして」いる母に感謝している。

共感・心配は感謝・尊敬に比べてかなり少ない。母に27回登場し父（19回）より多い。「体に負担がある（8人）」「ケガの危険がある（3人）」は父母両方にたいして共感し心配しているが、母にたいしては「慣れるまで難しい（3人）」「もらえるお金が安い（3人）」「パートなのに長時間労働（3人）」などパート労働への共感や心配が非常に多い。父に対しては「休みがとれない（2人）」「単身赴任で大変（2人）」など正規または自営業の忙しさにたいする共感・心配である。

不満・否定は母にたいしては男子1人（q）が、父にたいしては8（女子2、男子6）人が綴っていた。

qは「短い間で」「もう3回も」「パートの募集のちらしがあったから」という「単純な理由で」仕事を変える母の働き方を否定的に捉えている。「仕事への気持ち」を尋ねると「時間がくるまでいっしょうけんめいやること」と母は答え、qは自分なら「ぜったいそんなことはいわない」と思う。疲れがたまっていることに共感と心配を寄せながらも、qには母の働き方が尊敬できるものには思えないのである。その後学級では文章を相互に発表して読み合ったが、qが発表したとき、クラスの子どもたちは母はこんなに大変なのに頑張っていてすごいと言った。別の見方があることを知ってqはとても驚いていた。

父のペイドワークへの不満・否定には3つの内容があった。ひとつは、家にいないことが多く父と過ごせる時間が少ないという不満で5人が綴った。二つ目は、父が外でのストレスを家で発散することへの不満で2人が綴った。Dは「帰ってきた時のドアを開ける音で」機嫌がわかる「不機嫌な時にはあまり話しかけない」「それは怒るとこわいから」と、sは「母がいないときは（子どもに）『皿を洗いなさい』とか『そうじしろ』とか言」い「あまり気持ちはよくない」「とてもストレスがたまっているように見えた」（カッコ内の補足は筆者）と綴った。三つ目に、cは「友達とやっと仲良くなったと思ったら、引っ越しをしてそのくり返し、くり返しでした」と、父の転勤のたび自分も大変だったと振り返った。

V 考察

子どもが暮らしを綴った文章から明らかになったのは次のことである。第一に、多くの子どもはアンペイドワークを労働と認識していなかった。労働とはペイドワークであり中心を担うのは父とみる傾向があった。暮らしを綴る実践だったことからアンペイドワークを記述した子どもは半数近くいたが、それを労働と認識する子どもは少数だった。とはいえ、母や祖母を取材し綴ったことでアンペイドワークの存在に気づくようになったと推察される事例が目立った。第二に、アンペイドワークにたいしては女子と男子とで意味づけのしかたに違いがあった。女子は男子よりも多くのアンペイドワークを認識し、母に感謝し負担の大きさを心配していた。男子ではアンペイドワークをする母への感謝や尊敬はみられず、心配もほとんどしていなかった。男子では父がする（わずかな）アンペイドワークへの尊敬がみられ、そこにはペイドワークで生まれた尊敬が影響していたと考えられる。アンペイドワークの多くを母が担うことについて、男子では疑問を持つようすはないが、女子では「疑問に思っていなかったことに気づいた」とわかる表現があった。ペイドワークでは多くの子どもが感謝や尊敬を綴っていたが、なかでも父にたいしては多かった。母のペイドワークでは実態を淡々と綴る傾向があったが、父のペイドワークでは全員の文章に、多くは尊敬や感謝が意味づけされていた。

以上2つの結果は次のように解釈できる。アンペイドワークへの意味づけが女子と男子とで異なっていたのは、女子は将来担う可能性が高いアンペイドワークをよく意識しその価値も認めている一方、男子はそうではないという、性別分業観および性差別意識（女性役割の軽視）の内面化の結果だと推測できる。またベ

イドワークの綴り方に異なる傾向があったのも、母のペイドワークを父のそれよりも軽んじる考えが内面化されている結果だと考えられる。あるいは、取材の際母と父とで語り方に違いがあったかもしれない。つまり、親の側から、性別分業を当然視し、男性の労働のみが誇るべきものといった価値観が取材の際に伝達された結果とも考えられる。

最後に、以上をふまえて暮らしを綴る実践がもつ可能性について考察したい。第一に、暮らしを綴る実践は性別分業の実態や課題について子どもが自分で考え始める契機になると考えられる。母の労働を詳しく綴った文章には、負担が大きい母への共感や心配が読み取れた。子どもたちは暮らしを綴ることで、当たり前と思っていた性別分業について考え始めている。第二に、暮らしを綴り教室でさまざまな見方を交流することには、個人の限られた認識の限界を超える効果があると考えられる。qのように、子どもは発表して別の見方に気づく。交流はそれまで当たり前と思っていた見方に揺さぶりをかけ、子どもたちはそれについて改めて考え始める。第三に、自分の暮らしと社会の課題とをつないで考えることができる可能性がある。多くの女性はqの母と同じような状況で働いている。ほかにも長時間労働や家庭がストレス発散の場とされることなど、労働とジェンダーにかかわる社会の課題がここには浮かび上がってきている。

本研究では2000年に綴られた中学生の文章からジェンダーにかかわる課題を読み解いてきた。これを受けて望まれるのは「暮らしを綴る実践」の可能性を広げ、その方向性を明らかにするような研究である。例えば母と父どちらにも子どもが目を向けるには加えて何が必要かなど、今後明らかにしていく必要がある。筆者はその反省から、これ以降の実践にはアンペイドワークについて学ぶ過程を加えている⁽¹¹⁾。

取り上げた実践では明らかになったこともあるが足りなかったこともある。しかしこの実践は、総合の開始にあわせて現場の教員が本格的に労働に向き合い、学年で協力して行ったものでもある。分析対象とした作品は数量も時期も限られており、分析者（＝筆者）が実践を行った当事者であることから、解釈にバイアスが生じていることも考えられる。ただし、だからこそそのメリットもあると考えられる。筆者には作品を綴った子どもたちの当時の姿や生活のようすがありありと思い浮かぶ。綴った側と読む側の食い違いは避けられないとしても、「その場」に居合わせたことが本研究の分析結果に説得力をもたらすことを願っている。二つの労働が子どもの目にはこのようにみえており、学校にも家庭にもジェンダー・バイアスがある中で、働きかけが何もなく性別分業は子どもたちに再生産されるだろう。アンペイドワークは労働であり、本論が示す結果は二つの労働を視野に入れて学ぶ実践が必要であることを示唆している。

注

- (1) 2020年4月7日の緊急事態宣言の後、女性の就業者数は前月と比べて70万人（男性は39万人）減少した（『男女共同参画白書』2021）。ここではそのような急激な変化が起こる前のデータを用いる。
- (2) 学校で見せる姿だけでなく暮らしに目を向けることから「子ども」という表現を用いる。
- (3) 男子優先の慣習の代表的なものの一つは名簿である。2020年現在男女別・男子優先名簿を使う学校は全国では中学校で22%、中高一貫校で21%存在する（日本教職員組合調べ）。
- (4) 1947（昭和22）年の学習指導要領・国語科編（試案）では、国語科の学習内容は「話しかた、作文、読みかた、書きかた（習字を含む）、文法」である。文章をつくることの学習は国語教育が領域を拡張したのに伴い「作文」「綴方（つづりかた）」「書くこと」へと名称が変化した（西尾 1975）。
- (5) 「生活綴方」をキーワードに、「ジェンダー」という用語が広まり始めた1990年以降の研究をCiNiiで検索し（2021年3月まで）概観したがジェンダーの視点をもった研究は見あたらなかった。
- (6) 子どもにとっては「仕事」が身近な表現であることから授業では「仕事」を用いている。
- (7) 支え合う集団づくりをめざして子ども同士が進路をめぐる話し合う取組のこと（中野 2000）。
- (8) uの作品は下書きだけがあったため。37人中15人の文章を引用し電話とメールで承諾を得た。
- (9) 男女別で女子を先にしている。アルファベットの表記もそれに準じる。

- (10) ペイドワークの名称は職業分類表に配慮しながらもなるべく子どもの表現でまとめた。「内職」には雇用関係が認められていないが実際に働いているので同列に取り上げる。
- (11) 筆者は2003年にX町Z中学校で同様の実践を行い取材対象は母（祖母）62人、父（祖父）55人、それ以外（おば）1人だった。2018年までに実践した3つの学校で割合はほぼ変わらなかった。

引用文献一覧

- 日景弥生/早川和江 2001「小学校国語教科書における隠れたカリキュラム」『弘前大学教育学部紀要』第85号 pp.155-160
- 伊田久美子 2015「女性学・女性問題における貧困・階層問題—フェミニズムと労働をめぐる—」『大原社会問題研究所雑誌』680号 pp.21-32
- 岩槻知也 1998「識字教育における方法の体系化に関する予備的考察」『大阪大学人間科学部紀要』第24巻 pp.111-140
- 勝木洋子ほか 2020「教科の中の隠れたカリキュラム：ジェンダー平等の視点から見た道徳教科書の分析」『教職課程・実習支援センター研究年報』（3） pp.23-34
- 木村育恵 2004「教師—生徒間の相互作用によるジェンダー形成—児童調査の性別・学年別分析」『学校教育学研究論集』第9号 pp.27-38
- 木村涼子 1999『学校文化とジェンダー』勁草書房
- 国分一太郎 1977「生活綴方と集団主義」鈴木祥蔵/横田三郎編『部落解放をめざす集団主義教育』明治図書
- 森実 2000「人間関係づくりの理論と実践」中野睦夫/池田寛/中尾健次/森実共著『同和教育への招待』解放出版社 pp.83-118
- 中野睦夫 2000「教育課題としての進路保障」中野睦夫/池田寛/中尾健次/森実共著『同和教育への招待』解放出版社 pp.186-197
- 西尾実 1975『書くこと・綴ることの探求』教育出版
- 奥山えみ子 1993『対話 女子教育もんだい入門 自立を育てるために』労働教育センター
- 大沢真理 2011「経験知からの学射程の広がり」大沢真理編『承認と包摂—労働と生活の保障』岩波書店 pp.1-18
- 笹原恵 2003「男の子はいつも優先されている？—学校の『かくれたカリキュラム』」天野正子/木村涼子編『ジェンダーで学ぶ教育』世界思想社 pp.84-101
- 竹中恵美子 2011『竹中恵美子著作集第IV巻 家事労働（アンペイドワーク）論』明石書店
- 田中俊弥 2008「現代生活綴方の意義と方法論—国分一太郎の仕事に着目して」『解放教育』490号 解放教育研究所 pp.7-13
- 上田智子 2003『『ジェンダー・フリー』をいかに学ぶか？—相互行為としての授業』天野正子/木村涼子編『ジェンダーで学ぶ教育』世界思想社 pp.170-187
- 上床弥生 2011「中学校における生徒文化とジェンダー秩序—『ジェンダー・コード』に着目して」『教育社会学研究』第89集 pp.27-48
- 渡部孝子 2015「小学校外国語活動の教材に見られるジェンダー描写」『群馬大学教育学研究』〔15〕 pp.19-27

**Children's perceptions of unpaid and paid work
-From the educational practice of writing about the lives of
people close to them and their parents**

KUKITA Kinuyo

The purpose of this study is to explore how children perceive the two types of labor performed at home, and how they interpret them through the practice of writing about their lives. Using texts obtained from the author's personal practice in 2000, using both Japanese language and comprehensive learning time as the object of analysis, discourse analysis was conducted to explore children's perceptions at the time, that is, when they were in the first year of junior high school. Three issues were elucidated in the analysis. First, most of the children did not perceive unpaid work as labor, and considered only paid work as labor, with the father playing a central role. Nevertheless, nearly half of the children described unpaid work because it was a practice of writing concretely about their daily lives. Second, there was a difference in the way girls and boys interpreted unpaid work. Girls were more aware of unpaid work and recognized its value, compared to the boys. This suggests that children had internalized the gender division of labor and sexism (disregard for women's roles) at the time of writing. Third, the practice of writing about their daily lives could provide an opportunity for children to become aware of the existence of unpaid work, and consider the actual situation and issues of gender division of labor.